

## 第 17 回風景デザインサロン「空間の履歴と風景」報告

平成 22 年 10 月 12 日、第 17 回風景デザインサロン「空間の履歴と風景」を開催いたしました。桑子敏雄氏の基調講演がおこなわれたのち、桑子氏と島谷幸宏氏による九州の風景を題材にした対談がおこなわれました。本報告レポートでは、基調講演と対談の内容の要点をまとめてご報告いたします。

### 1) 概要

講師：桑子敏雄氏（哲学者 / 東京工業大学大学院教授）

日時：10 月 12 日（火）16：00～18：30

会場：福岡アジア美術館 あじびホール

参加者：70 名（講師含む）

プログラム：16:00～16:05 主旨説明 / 渡邊加奈氏（九州大学大学院）

16:05～17:00 基調講演「空間の履歴と風景」 / 桑子敏雄氏

17:00～17:10 休憩

17:10～18:30 対談「九州の風景を見分ける」

／ 桑子敏雄氏 × 島谷幸宏氏（河川工学 / 九州大学大学院教授）

### 2) 主旨説明

渡邊加奈氏（九州大学大学院）

『「景観の価値」をその根底から捉えようとするならば、「景観の歴史」だけでなく、その一步先に踏み出す必要があります。「景観の歴史」では、一人ひとりの人生とともにある風景の価値については、論じることができません。だから、「景観」から「風景」へ、そして「風景」から「空間の履歴」へと意識を向け変えよう。風景の向こう側にある空間の履歴を掘り起こそう。空間の履歴を発掘することが、風景の価値の探求を、さらにその向こうにある環境のもつ価値へと導くであろう。』（桑子敏雄氏『風景のなかの環境哲学』より）

哲学者・桑子敏雄氏によれば、「空間の履歴」とは人と空間がどのような関係を結んできたかという過去の出来事の蓄積である、といます。私たち専門家や技術者は、その空間の履歴を読み、風景の本当の価値を見分ける力を持たなければなりません。

本サロンでは、まず、桑子氏に「空間の履歴と風景」と題してご講演いただき、つづいて島谷幸宏氏との対談により「九州の風景の見分け方」についてご議論いただきます。

風景やデザインに関わる様々な分野の方々にお集まりいただき、お二人の議論を聞きながら「風景デザイン」に対する見方を広げ、さらに、会場の皆さんとともにそうした九州の風景にいかに関わっていくのかについて、議論を深める機会としたいと思います。

### 3) 基調講演「空間の履歴と風景」要旨

桑子敏雄氏（哲学者／東京工業大学大学院教授）

#### 【風景と人間】

##### 風景との出会い

人は人生のなかで風景と出会う。「出会う」というのは、一つの出来事である。「出会う」という出来事は、人間にとって本質的な存在契機である。本質的な存在契機というのは、人間が存在するときに、そして、自己が存在するということを了解するときに、その了解の契機となっているということである。わたしたちが自己の存在を了解すると



は、まず、自己の存在を感じることに、実感することである。「自分という存在がこの世界に存在している、生きている」と感じ、また、そのことを意識することである。自己の存在を了解するということが、自己の存在の本質的契機である。風景との出会いは、そのような契機を提供する。

##### 風景 とともに あること

わたしたちの人生は、風景とともに始まり、風景とともにあり、風景とともに終わる。人間にとって存在するとは、風景とともにあるということである。人間にとっての存在契機、すなわち、自己了解の契機は、風景とともにある自己の発見であり、自己の感覚である。ハイデガーによれば、人間は、「世界内存在」であるが、わたしの表現でいえば、人間とは、「風景とともにあること」「風景とともにある存在」である。「とともに」というのは、二つのものが一緒にあるという意味ではない。一方がなければ他方は存在しないという意味である。風景についての考察を深めるということは、「風景とともにあること」としての人間の自己理解を深めるということの意味している。風景について深く思索することは、自己の存在を深く思索することと同じである。

##### 風景の危機

風景の意味が二十世紀の思想と技術の課題として再認識されたとき、人びとが風景の重要性に気づき始めたとき、そのことが意味するのは、人間にとって風景がすでに危機的な状況に陥っているという事態である。景観の崩壊が人間にとってなにか抜き差しならないものの喪失、本当に大切なものが忘れ去られていたという事態の認識が現代人の心のなかに生まれてきているのである。わたしは、風景の危機は、人間自身の危機、人間存在そのものの危機であるという認識をもつ。風景の崩壊は、人間自身の崩壊の予兆である。この予兆を感じ取り、風景のもつ意味を問い直し、風景を作り直す方法について考察すること、そのことは、それ自体が人間の自己自身の進む方向性を感じ取り、自己の意味を問い直し、自己のあり方を作り直す方法を問うことでもある。それでもなお、風景が人間にとって、

人間そのものの存在契機であるということを十分認識するまでには至っていない。認識への到達に足踏みしながら、わたしたちは、なにか本当に重要な、ひょっとすると自己自身の一部を喪失しつつあるのではないかという不安と恐れの中にある。その恐れを乗り越えながら、わたしたちは、風景と人間の「ともにある」ことの意味を問わなくてはならない。

#### 【風景 とともに とともにあること】

(歌川広重 / 名所江戸百景・深川萬年橋について)

広重は、特に江戸のお祭りやお正月といった色々なイベントの中に生きる江戸の人々の喜びを、あまり人を描かないで描いている。人のいない風景を描きながら、実はそこに生きる人々のまなざしがあふれている。「深川萬年橋」には、人は一人も描いていないが、人がいっぱい描いてある。子供のまなざし、親のまなざし。皆それぞれのまなざしで見ている。そして、広重のまなざしの大事な点は、そこに亀のまなざしが重なっていることである。皆がそれぞれのまなざしを持って同じ空間を眺めたとき、まなざしの賑わいによって、その空間というのは本当に



豊かな姿を持って現れてくる。一人が一つの見方を持って風景を見るのではなく、色々な人が色々な見方を持ってひとつの風景を見ることで、それぞれ見方は違って、風景そのものは人々に共有されてくる。人間は一人ひとり、風景とともにある。けれど、孤独に風景とともにあるのではなく、風景や空間を捉える多くの人々とともにある。多くの人々とともにあるだけでなく、他の生き物とも、とともにある。「風景 とともに とともにあること」によって、風景は豊かに現れてくる。「まなざしを賑わせること」が、これからの景観づくりに非常に大きな意味を持つのではないかと思う。

#### 4) 対談「九州の風景を見分ける」要旨

桑子敏雄氏 × 島谷幸宏氏 (河川工学 / 九州大学院教授)

##### 【日本文化の空間学研究の始まり】

「空間を日本文化の視点で考えてみよう」と考え、島谷先生や文化人類学、宗教学など色々な専門の人たちと「空間」と「合意形成」をテーマにした研究プロジェクトを7年前に立ち上げた。人と人の対立の解決方法を模索していた。日本の歴史の中で一番紛争や対立があった時代というのは戦国時代であるが、この戦国時代に日本人がどういう文化をつくってきたかということ、関係者が同じ部屋に集まって、お茶やお華や連歌などのパフォーマンスをして、それをコミュニケーションの手段にしていたのである。そこで、実際に多様な関心をもつ人が、空間、座を共有するということはどういう効果があるのか、実際にやってみたくて研究が始まった。



##### 【高千穂の風景】

高千穂では、夜神楽で「天の岩戸開き」というアマテラスとスサノオが相続した田んぼをめぐって喧嘩をする演目を見た。その中では、川のそばの広い田んぼは悪い田んぼで、狭い棚田は良い田んぼだということになっているのを見て、組織力をもって水を管理できない時代には、水の管理がしやすい場所が非常に良い場所であったのではないかと気がわかった。そこから、日本の風景の原点は「水をどう管理するのか」というところにあるのではないかと、リスクと恵みのバランスをとることが非常に風景のあり方に現れているのではないかと高千穂で最初に勉強した。

##### 【湯布院の風景】

九州は古い水の施設が残っていて、日本書紀の伝説に残っているものがたくさんある。その中に裂田の溝(さくたのうなで)というものがある。田んぼの次に私たちが問題にしたのは、この溝である。湯布院の宇奈岐姫(うなぎひめ)神社という神社は水が湧き出す重要な位置にあり、本殿全体が池に囲まれている神社である。この「宇奈岐」は溝(水路)の「うねり」と関連があるのではないかと考えている。実際、神社の近くの田んぼの水路は大きくうねっている。水路が等高線につくられているために、曲がっているのである。等高線上に水を移動させて、ところどころに取水口をつくれれば、下の田んぼにもみんなに水をまわすことができる仕組みになっているのである。

##### 【姥が懐の風景】

姥が懐(うばがふところ)では、漁港と漁港を結ぶ道路の計画があったのだが、この場所には龍姫神社、美野島、英彦山神社とそれらにまつわる神聖な場所があり、海幸山幸の神話の地であったために、反対運動が起こっていた。そこで、この場所の大切さをみんなで

理解しようとワークショップやシンポジウムを開催したりして活動を応援した。この中で勉強したことがきっかけで、次は有明海に行った。

#### 【有明海の風景】

有明海では、大川の風浪宮（ふうろうぐう）から船に乗って有明海まで行って、海の底に社をたてて、潮が引いたところで祭事をおこなうお祭りを見に行った。その周りではみんなが貝取りをしたり、魚を採ったりするのだが、そのお祭りでは干し柿が売られていたことが面白かった。それは、海と山が交流する中で、海を大事にするということと山を大事にするということは別々のことでなく、つながっているという認識が古代にはあったということである。海の民は、山の民と連携してやらなければ、生業も営めなかったということだろうと思う。

このように、桑子・島谷は日本の文化形成を辿り、各地で議論してきたのである。

#### 【未来に向けたメッセージ】

風景の持っている意味や価値は、それが変えられてしまう前に、地域の人たちがきちんと認識していることが大事なことである。当たり前の風景のように見えるが、実はそこに我々の先人たちの知恵や努力がたくさん蓄積されている。それを知るためには、古事記や日本書紀、風土記もちゃんと読まなければならないし、地形をよまなければいけない。それがどのくらいしっかりと読めるかによって、その風景のもつ意味というものがわかってくる。さらに、色々な知識や経験を持った人たちが議論することで、まなざしの賑わいが生まれ、初めて「風景の奥にあるもの」がみえてくる。

また、高千穂の天安河原（あまのやすがわら）の合意形成について言えば、要するにみんな話合うことである。偉い人の提案を採用するのではなく、八百万の神々が話しあって、みんなの想いを兼ねる良い提案をできた人の提案を採用する仕組みになっている。それから、つらい話し合いをするときにも、そこにおもしろい仕組みを組み込んで、最後はぐずぐずしないで、決断する、と。みんな話合い、熟慮した提案を採用し、話題も工夫を凝らしながら、決断へと至る過程、これを「合意形成」と考えている。